

は し が き

本書は、長期の外国出張者などを除く京都大学東南アジア研究センターの全教官が、過去5年間に公表した論文のなかから各自一編を選び、あるいは新たに書きおこした論文を加えて一冊に収録したものである。私どもは、本書と同じような形で、6年前に『東南アジアの自然・社会・経済』（創文社、1974）と題する一書を刊行している。当時の同僚たちが、センター創設時から約10年間にあげた研究成果の一端を世に問うた論文集であるが、幸にして多くの方々から好評を受けることができた。東南アジア研究センターは本年をもって創設15周年を迎えることになったが、本書はそれを記念して出版する2冊目の論文集ということになる。

15年という年数は、内外のこの種の学術研究機関とくらべれば、きわめて短い日数にしかすぎない。にもかかわらず、この歳月は、私どものセンターにひとつの「学風」を芽ばえさせるにも足る年月であったかに思える。ここに収録した多くの論文を通覧してみると、そのいずれもが長期間にわたる現地での研究と生活に根ざし、それぞれの学問的立場から具体的な諸事象を分析しようとしていること、そしていまだ不十分なながらも東南アジアという独自の内的世界像を構築することを、共通的な問題意識としてもちはじめていることがわかる。センターにおける地域研究の方法論的展開の過程については、巻末の解説で矢野暢教授が詳しく述べているが、私は、センター発足当時から考えてきた東南アジアを対象とする地域研究のあり方についての模索の一過程として、本書を江湖に問い、ご批判をいただきたいと思う。

ふりかえてみると、前著『東南アジアの自然・社会・経済』に労作を寄せられた本岡武教授は定年でセンターを去られ、また昨年10月には水野浩一教授が病魔のため不帰の客となられた。センター創設当初からの関係者であるおふたりの論文を、本書のなかに発見できないことが寂しい。しかし、新進の若手

研究者の力作が、前著に増して多いことがまことに心強い。これら気鋭の諸論文を読むにつけ、東南アジア研究の将来に希望を感ずるのは私ひとりではあるまい。6年前の論文集の序文に、市村真一教授（前所長）が「この論文集を読む青年のなかから、アジア研究を志す若き学究が輩出してほしい」と切望されているが、本書を編むにあたって私も全く同じ感慨をいただく。本格的な東南アジア研究の成否は、若い学徒の精進に期待するところがきわめて大きいからである。

最後に、過去15年の間、センターの研究活動を力強く支えてこられた諸先輩と、かつての同僚諸氏に心から感謝すると共に、さらに次なる20年、30年への研究の飛躍を期することによって、私どもは学内・外からのご支援にもこたえたいと思う。

1980年5月

京都大学東南アジア
研究センター 所長

渡 部 忠 世